

2013 年度

博士論文

可視的な角から不可視的な角へ
—自らの経験と作品をめぐって—

多摩美術大学大学院美術研究科

金 利朱

2013 年度

博 士 論 文

学 位 の 種 類	博士（芸術）
学 位 記 番 号	甲第 55 号
学 位 授 与 日	平成 26 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当

主査	中村 隆夫	教授
副査	久保田 晃弘	教授
副査	渡辺 達正	教授
副査	北川 健次	版画家

可視的な角から不可視的な角へ

—自らの経験と作品をめぐって—

多摩美術大学大学院美術研究科

金 利朱

本論文『可視的な角から不可視的な角へ』では、角（つの）に関するさまざまな要素を扱いながら、私が作品で表現した角の個別の意味とそれに基づいた作品展開について考察することを目的とした。

私たちは「角（つの）」を社会的な言語として日常的に使用しているが、実際に目に見える角は「動物の頭部に堅く突き出ているもの」であり、その役割は「武器として使用する」ことである。これは小学生でも知っている角に対する知識であろう。しかし私たち人間にはない角が、見慣れた動物にはあるという差異の中に私たちはしばしば神秘や怪奇を感じ、一方外観からは華麗さなどを、役割及び機能からは力強さ、逞しさを感じるだろう。このように、私たちは諸々の事物の象徴を、しばしば自身がそれに抱く感情に対応して造り出しているのである。

私がこうした角の基本的な要素を並べた理由は、私の作品の中に表している角がこのような象徴的要素を伴っていると同時に、そこに自分の経験が付加されてきわめて個人的な象徴を作り上げていることを示すことにある。あえて結論から云うとすれば、角は私にとっては「抑圧的な存在」なのである。これは上述した要素の説明とは多少離れた、あまりにも個人的で感情的なとらえ方であるかもしれない。しかし私が動物園で角を見た時、それは明快に説明することも分析することもできず、突発的な痛みを伴って私に迫ってきたのである。私の方から何かを求めて角に向かったわけではなく、向こうから矢のように襲いかかり、私を刺し貫いたのだった。

これと似た現象に、写真芸術における「プンクトゥム」がある。これはロラン・バルトが初めて使用した言葉で「ラテン語には、そうした傷、刺し傷、鋭くとがった道具によってつけられた標識を表わす語がある。しかもその語は、点を打つという観念にも関係がある」としている。私たちはある種の写真をみて、ときには感動に満ちた感情をいだくことがある。それは一般的な思い入れ、平均的な情緒のようにコード化できるものではなく、もっぱら私という個人だけを閃光のように突き刺して情動を起こさせるものである。それは何かに刺された傷のように痛みを伴うものになり、その感動はまったく個人的な経験に発するものであるため、他人から共感を得ることは難しい。このように解釈がきわめて難しい不思議な痛みを生むプンクトゥムを、そしてそれに似た私の角に対する感情をいかに説明すればいいのだろうか。

そこで私はまず、確実なものとして明示されている角の研究から始めた。論文の構成を第一部と第二部に分け、第一部は本論に入るための事前調査として、曖昧なまま残されている角の概念を、客観的な側面から考察した。第二部は本論として自分の作品に描かれた角を、第一部で行った調査と関連づけて考察した。

第二部の第一章では象徴とは何か、また象徴をめぐるさまざまな言説を考察した。そこでは私に抑圧的なものとして感じられた角が、神話や芸術、文化の中

ではどのようなシンボル（象徴）となっているのかを調査した。それと同時に、私がなぜ、またどのようなプロセスをへて角に、バルトのいうプンクトゥムを感じたのかという、精神的な経緯を言語化してみた。

第二章では、実際に角をモチーフにしている作家としてモンゴルの作家ダヴァー・ドルジェレムとベルギーの女性作家ベリンデ・デ・ブリュッケレを例に挙げ、彼らの発言や作品の中で角がどのように扱われ、どのような象徴的意味を帯びているのかを分析、考察した。

第三章の「可視的な角から不可視的な角へ」では、自作の展開について記述した。命題からも推測されるように、私の作品は角の形を画面に表現することから、角そのものを画面から徐々に消滅させて、角に象徴される内面的イメージを表現する方向に向かっている。しかしここで強調したいことは、画面から角が消えたとしても、それが角の表現であり続けるということである。私にとって角はもはや外面的な形相ではない。したがって制作においてはその中に隠れている象徴に重点を置いている。言い換えれば、可視的な角であれ、不可視的な角であれ、表現しようとする内容は同様なのである。こうした作品展開について、私は自分が制作している銅版の表現方法を心理状態と関連づけて、最終的には自らを分析した。

本論文を執筆することで、主観的で無定形な感情を言語化、客観化することができ、またそれを作品に表すことによって、意識の奥深くに潜在している「自分自身」と対面することもできた。さらに今までの自分の中に曖昧のまま残されていた作品世界を再確認するまでに至ったのである。今後もより幅広く、またより客観的な思考により、真正面から自分の作品世界を受けとめることができると確信している。

創作研究による作品

多摩美術大学学位規程第 4 条第 2 項



サイクル 2011 銅版画 90.0×60.0cm

Cyc/e 2011 Copperplate print 90.0×60.0cm



心状の風景 2012 銅版画 90.0×60.0cm

Mental image 2012 Copperplate print 90.0×60.0cm



抑圧 2014 銅版画 100.0×50.0cm

Repression 2014 copperplate print 100.0×50.0cm



I' m feeling low 2012 銅版画 70.5×99.5cm

I' m feeling low 2012 Copperplate print 70.5×99.5cm